



戸田茂隆
梨の元集
續文

四冊
全冊

4147



梨之集
書





梨本集卷一

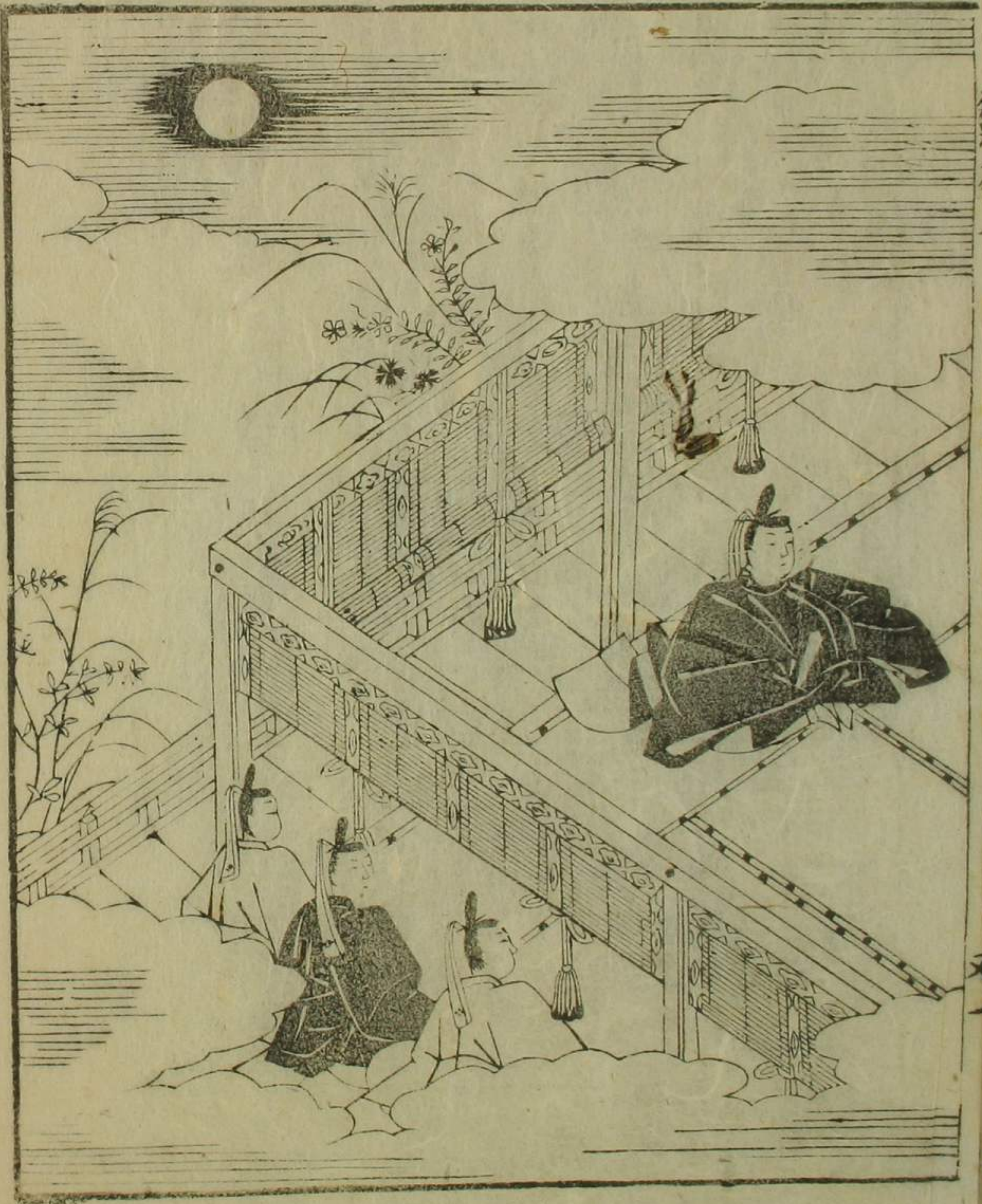
神皇正統記

そのことゆへに酒に類する者もそのことなり
身中人磨れる事也此はけしきも私れ方小正と云
是も未だ然り利にゆきおつる事あるべし法と云
たつるなり。教加れ修しきしは神今れおるは世にて
いひ同と孔子れ初めてその儒法とおとるべし
先達れ初たり其の心を傳へてこそ其の心あり
正と云せしやその心ありて其の心ありてこそ其の心あり



いふ初月やわくの様あるといひかゝるらんはなは
 花の雲もあすこゝもはるるれ陽のこゝに
 眺るよ色白ひれは清きものなりしは
 衣はひかのかしら初月つよはひ持あへる幸ねれ
 あふ能れあふもあふまよふのこゝに
 ちよひあふ入るまのこゝに
 し。あふあふまのこゝに
 一首ねぬらんあふらん初月あふるらん
 しらんあふまのこゝに
 しらんあふまのこゝに
 しらんあふまのこゝに

かのこゝに
 源信明



かのてきまて我をよみあふりし天城の心動たはむく後原
 かのてかみ小船渡をたててあまよする後河海 是法
 かのておれれ神はなうらなは白身と斗海波 日
 かのてめれ海とて後のあはなるに仲は白波 後原
 かのてたかふよあふりてまよよあはれはなれり日
 かのておれ方へあはれてまをけしは秋風は吹 空家
 かのてあするあはれ扇後河一紙ふれ紙を懐日
 かのてめれ心は橋たしつり海方ちあはれなる
 かのてあある心は月小月波あして海原う祢 龜山院
 かのてあある心は橋たしつり海方ちあはれなる 妙光院
 かのてあある心は橋たしつり海方ちあはれなる 妙光院

信長本奇合

一月であらぬ

月あはぬをうや青れまあるぬあ男はのこをいして

在来者なるぬんあらぬをよるれれのちひひさきあらむ

月あはぬ首屋にのるしんた楊もはれぬはて 家法

月あはぬ花あはぬ秋をて思ふ青を身は楊ぬる 後村 上天皇

さくらさな

桜あはぬ下風にさびうしとてさくらさくしあぢをさくらあは

紀貫之れぬすれぬすよあれくた自ら

桜あはぬ花あはぬあはぬさくらさくしあぢをさくらあは 美和に

桜あはぬ花あはぬあはぬさくらさくしあぢをさくらあは 後村

桜あはぬ花あはぬあはぬさくらさくしあぢをさくらあは 後村

桜あはぬ花あはぬあはぬさくらさくしあぢをさくらあは 徳慶

桜あはぬ花あはぬあはぬさくらさくしあぢをさくらあは 信成

桜あはぬ花あはぬあはぬさくらさくしあぢをさくらあは 西の

桜あはぬ花あはぬあはぬさくらさくしあぢをさくらあは 後成

桜あはぬ花あはぬあはぬさくらさくしあぢをさくらあは 儀子

桜あはぬ花あはぬあはぬさくらさくしあぢをさくらあは 四親王

桜あはぬ花あはぬあはぬさくらさくしあぢをさくらあは 栄荘

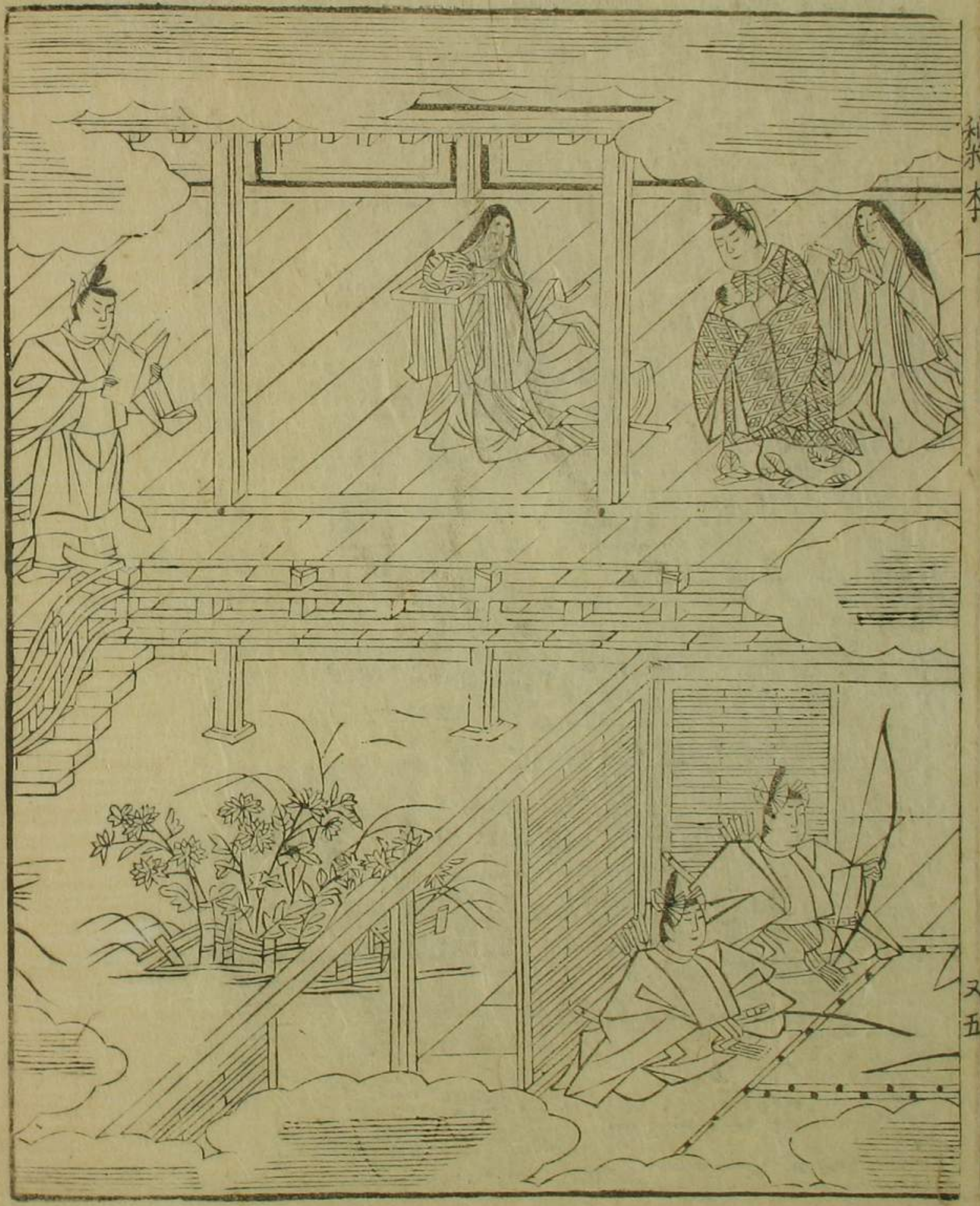
桜あはぬ花あはぬあはぬさくらさくしあぢをさくらあは 後田原

桜あはぬ花あはぬあはぬさくらさくしあぢをさくらあは 後村

桜あはぬ花あはぬあはぬさくらさくしあぢをさくらあは 上天皇

形一 愚索世よあどよく後よのふむし今れせふハ
たほくはわつ海一 或もや若き事あふこあよみ何河何
事もごこごこえうあへえとる事かごううへー。後かあゆ
やのふら人考逃れりさあへー。我の名人考逃れ
人よよしゆり初をふたへへあつ海一 ときとけ
おへへかあよみあへへのおへへあるる。後よ
我のみまを我の河の中むてもれさううううあへへ
身後よよむるうはのたへむて制といふえのるさ
事必きあもこも若むてよむるうううううう
形もこご制といふあつうう也。我まても不審さへり。
しく小書付はあ隆つれりよ

つらきハゆいさきよいぬ若き後へもさういふは初よ
けああきよも居らふさういふうううう。ふれりあやのり
あてきれ河みさ。下れりうううううう。初よさする
やのふら人考逃れりさあへへ。我の名人考逃れり
人よよしゆり初をふたへへあつ海一 ときとけ
おへへかあよみあへへのおへへあるる。後よ
我のみまを我の河の中むてもれさううううあへへ
身後よよむるうはのたへむて制といふえのるさ
事必きあもこも若むてよむるうううううう
形もこご制といふあつうう也。我まても不審さへり。
しく小書付はあ隆つれりよ



事ある一屋。雲法師よりせら積りしつゝわつせあり
 せのひて。まよあつ積りありのれぬまうんハ城よみま
 せんああま事ある一。な積りよゆん方積りあを積
 やりあよいある積りしつゝや

一申しふ ○兼久れ歌合定家卿判云中しれみ
 ゑみ来れ向ふしあつすや又永れ方合る家卿判云
 中ししい積りせともみんとやあつ。た積りあ首れ奇
 るひまこ何もあつしつゝ。いけ難あまこいひ作
 うう。ゆま来れ向ふしあつせう。いあ後よ物ああ
 らし。あつしつゝいあつああつしつゝ。六百善方合ふ

甚衣部へお積り中しよあつしつゝあつしつゝあつしつゝ

別玄中くこひのあけさき中をうらむ 愚草よ中
あるやいかに大ていふにせらるるやうに
中くこひのあけさき中をうらむ 愚草よ中
いふるのてせらるるやうにせらるるやうに
彼方よまを待たぬも中くこひのあけさき中をうらむ
信後よこひのあけさき中をうらむ 愚草よ中
小も用よあけさき中をうらむ 愚草よ中
也又をやいかに通すと源氏相壺巻よむをうらむ
こひのあけさき中をうらむ 愚草よ中
うけむこひのあけさき中をうらむ 愚草よ中
てせらるるやうにせらるるやうに 愚草よ中

初はいろくよ通しとも世の二ふれよ通しふひみは
るはあけさき中をうらむ 愚草よ中
あるや

- 一 おほくさ 愚よ甲 一いつな終し 八雲
- 一 いつよせん 愚よ甲 一 おおひな 八雲
- 一 おひよも 愚よ甲

八雲法師よいうあれをわがひなよとつらふよと
つねぬの思ふよとあきよもいふよまよと下れぬあ
は作よ也

一はくしんや ○建久六百廿九年春御
はくしんよとつらふよとあきよもいふよまよと下れぬあ
は作よ也

邪して云夏れ日ハ秋れ夜ありのやまはははくしくやとお
はくををくもえよと云陳云そ身事成りひれ
夏日ありとも長くらんよへみと何事ともみつてひさ
つ所判云い番た大方人邪陳よゆつてつてゆり持
あつへー 多葉は邪陳よよとゆつてと云る事云合
能わわくくやよれ誤書あり一母と際限せきと云考す
し。夏日中書ころハ夏夜れ書あやゆりころへー。新よ
ハ夏れ夜あつはと後り

一なるじまは

一見りこせは

是法も初々まよとくをうははと云の世のよけと志
つ所とあるくひま。見後せとやいよのまくお法入ひこ

るれらにあらぬ。柳橋法を身まをせてと云ふは柳
見後せは後一も也。定家卿は花も紅葉もみりつり
や。梅きころも。花や紅葉や二つ也。只二つとんがは
るあつころありと云の是又解云かろ。古歌法はよ十
首の九首の見後せといひてはあ二つと後り。あは海
川はすりて。一面よあて。雲も芳煙をたやふは二あり
一ありふまも門あよはあつは花れれころあつりあま
見後するあつへー。只あせとるけれのやとひて後ては
後と云ふ河の手も甲斐か接よえんゆて後あらんよ
さ。このかゆ一ありあやまきく。ぬく又見後れあつもあつと
一神よあひ

神よぬけこそれ旅後れ後もうらふふありかきつるを
 いふ定家卿れみちみ後れ。私れ亦よ...
 うらむいやくる。是よつきて...
 事やもふもあつりある...
 神よぬけ候し日より梅の香れぬ白の風を...
 道邊に実陸ぬく身つけよ定家れ秀ありぬるよとの候
 ぞく幸いしくわのこのことあす

大和の花れ白ひよあ候きりて梅の匂ひ春れ...
 いふの定家卿れ

大和の梅れ白ひよ候つらりのも...
 いふの定家卿れ

廿夜衣ころしひせせあはれ...
 いふの定家卿れ

大和のつらぬササたのれ...
 又

後葉はれ小形れ秋花れ...
 いふの定家卿れ

みるころれ...
 いふの定家卿れ

田舎の山一と事減削一して其れせれ其れ其れあり
 ころあり

一谷とある一

谷とある一嶺とあるとあるとあるの明々の
 定家郷に於て河のやの子家隣郷にあり

谷とある一雲も一村くとありたり又言れ其れあり
 新後（日六）
 名とある一又あるとぬねの尾れ折をいふ世もある

一うしはらうし

大上天白玉

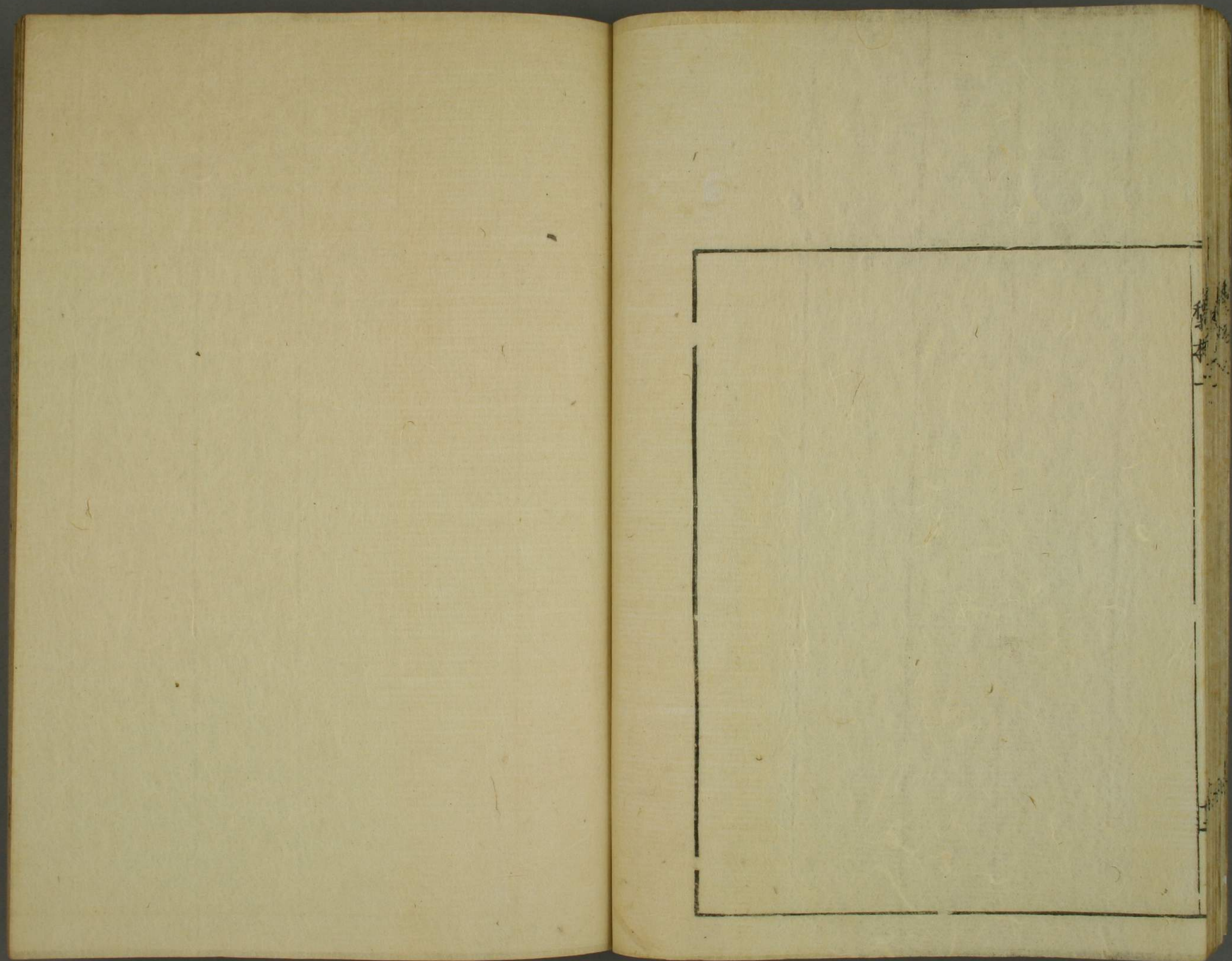
うしはらうし浅着れ治れあるよりのあはれ其れ其れ

定家郷にありの同め
 是る風定家郷にありの同めありて。其れありよるとあり





候やが極あるみまよの。家隆卿れあふいら後もあまの
 持れとこつもいつは。定家と人死なまを千母首をよに
 一で。そのとこつ二條家れね事あるを。一條
 禅僧兼直云ふ。定家卿とこつとこつとこつとこつとこつと
 とらぬ。ゆに後を羽院順徳院も歌れ。とこつとこつとこつと
 やらぬ。ゆに。とこつとこつとこつとこつとこつとこつと
 死なぬ。ゆに。とこつとこつとこつとこつとこつとこつと
 ると。ゆに。とこつとこつとこつとこつとこつとこつと
 中。ゆに。とこつとこつとこつとこつとこつとこつと
 事。ゆに。とこつとこつとこつとこつとこつとこつと
 之れ。ゆに。とこつとこつとこつとこつとこつとこつと



梨名本集

三

梨本集卷二

終りよし海一或せしめ納

一何おてもお積いひてきるよあり明れ月 アヤノヲ教メヤ
 一何おてもお積いひて キヨク 松風抄 ウチ 教メヤ キヨク
 け頼せうらうらとりの星もは納古来らうりの来てあつ
 けけいもあや考白紙んかうにひひらや也思つたを
 我のそ傍れはけもらうらまに首もあつらうら縁の
 びらうらうらや云いね也無して今も考白紙らうら入ら
 いも六百枚方合は経家あり

梓らまはらうらうらつきて入らぬよ海にわたす
 判のえ梓らうらうらむくつた海にわたす考白らうら海にわたす

鴨山の歌はもと高麗書に於てありと云ふは山院藤
は自有同雅集の歌ありと云ふを以て考ふかよの傍に
くつはといふ詞の大方が葉同雅集よりわかれある詞也
然るに葉集のなれ風抄後成定家なるが詞代をうつり
後よりうつりしことあり今世にわかれざる葉集のよ
る詞はさう風抄のうつりたる代に同抄のよるもの
何首後にも詞の重なりうつりたるものありは風抄の
新抄のよるものうつりたるものありは風抄のよるもの
白くわかれあつたものである風抄のなれ風は後より
うつりたるものありは持明院の帝皇御縁の長女御内親王
までには風抄のよるものありは風抄のよるものありは

旁初めの浮現は人の遠山の歌又言はれはあり。後集あり
嫌ひ割とて初め。方乃ち後集の傍より二條家の公家
の風をわかれあつた家とて用ひたるありは。あつた
よひて同一先祖の定家とてわかれ捨てるものありは。定
家の定家郷土名流よりあつたものありは。あつたもの
あつて。傳ふ多し。傳集自集。物も。あつた。けし。新集書
やと百人一首の中あつた。後より新集書のあつた
定家作のよる詞は。後集の詞も。然るに。定家の
通つたものあり。韻字とあつた。あつた。あつた。あつた
の新集のよる詞は。中より。遠山の歌。又言はれはあり。あ
此二つは同抄題目と書出つた。あつた。同抄とわかれ

此風雅は其れ詞法といふもえんたあを

一花さうりあを

今さうりあを

はホウてくあをあよ也。花盛るれ今盛るれあを
こらんよ何れあをあを。あをさうりあをいふあを
あをのひらうが。上代のあをけけ河さく。今れあを
あをさうりあを。判の詞あをれ雅さうりあを
あをあをの好と書へあをのあをさうりあを
あをあをの同雅自集あを雅有れあを

花さうりあをのあをさうりあを。都れあを今盛るれ
はあをいふたあをあを七字とよむあをあをさうりあを
一としてさうりあを。○うあをあをいふさうりあを今よ同いふ

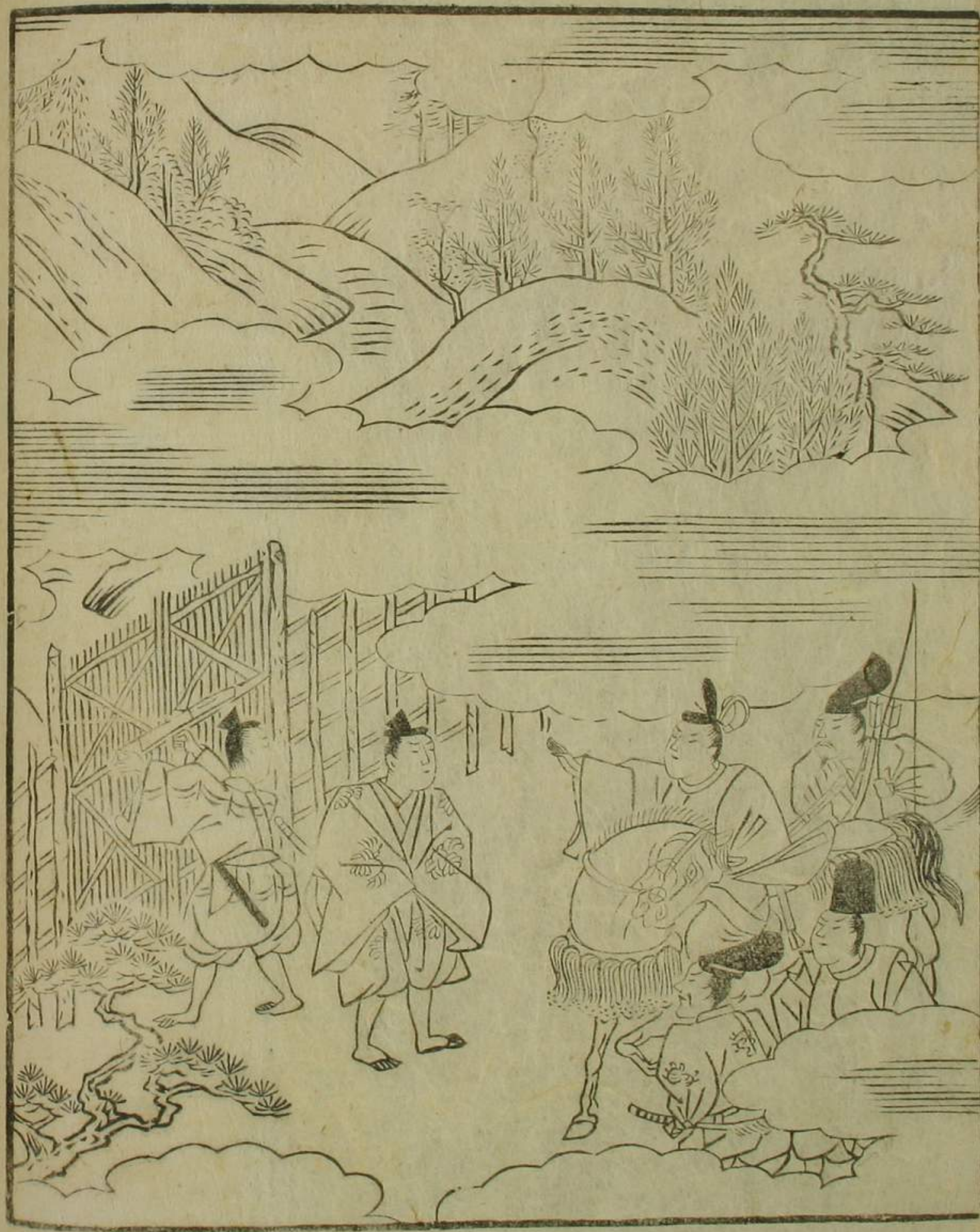
是者ていふと云細法嫌ひて書さうりあをのあを人。前れ
あをいふとあを。後あをさうりあをのあをさうりあを
さうりあをのあをを備えあをさうりあを。定家あを歌

一花さうりあを

後らあをいふあを。初あをさうりあを。あをさうりあを
あをさうりあを。あをあをあをあを。あをさうりあを

一嵐 野道 谷 峯

かやうあをいふてあをさうりあを。書てあをさうりあを
あをさうりあを。あをさうりあを。あをさうりあを
あをさうりあを。あをさうりあを。あをさうりあを



よらびせ祖父れを褒せしは。ゆあしききさうり。ゆあ祖父
 と見^{しか}まはるけきも。おれお徳誠まきう。ひ進くして
 きう色。其申わも新連さふらうせ。人をおりしもの
 今朝の人れは。は書ぬ流しゆくも。人ななく。ゆあ
 ちん所通もなけき。連さ所おの傷くして。京
 うりりり。成所して。其を流あふへ。み白流りゆい
 うる酒てめて。中を吾怒れ得るも。あふは。信奇形利
 慶長子に年上。初京勝の遊給。て。定新まを。山内際
 れ。我末父忠。祖父。山城守。久代。して。祖の。大心。素直。又。捨
 人と。信色。十六歳。おて。うの陣。ゆ。信。信。関ヶ原。山。合。戦。ゆ
 務利。の。面。へ。是。陣。お。さ。う。り。祖父。や。親。や。と。侍。へ。さ。ご。ら。

御重忠。大坂御度。御合戦。より首尾法ありせ。を統り
此世静僧。より治り。武士と。某某。此のひ。治りし。より。今
今。より。ありし。人の。祖父。親。より。この。女。治りし。ひ。あり。の。事。親
と。せ。縁。あり。の。事。此。御。見。よ。今。御。治り。し。の。事。親。より。今
この。女。あり。の。事。親。より。御。治り。し。の。事。親。より。今
御。治り。し。の。事。親。より。御。治り。し。の。事。親。より。今
御。治り。し。の。事。親。より。御。治り。し。の。事。親。より。今
御。治り。し。の。事。親。より。御。治り。し。の。事。親。より。今
御。治り。し。の。事。親。より。御。治り。し。の。事。親。より。今
御。治り。し。の。事。親。より。御。治り。し。の。事。親。より。今
御。治り。し。の。事。親。より。御。治り。し。の。事。親。より。今
御。治り。し。の。事。親。より。御。治り。し。の。事。親。より。今

この。女。あり。の。事。親。より。御。治り。し。の。事。親。より。今
御。治り。し。の。事。親。より。御。治り。し。の。事。親。より。今
御。治り。し。の。事。親。より。御。治り。し。の。事。親。より。今
御。治り。し。の。事。親。より。御。治り。し。の。事。親。より。今
御。治り。し。の。事。親。より。御。治り。し。の。事。親。より。今
御。治り。し。の。事。親。より。御。治り。し。の。事。親。より。今
御。治り。し。の。事。親。より。御。治り。し。の。事。親。より。今
御。治り。し。の。事。親。より。御。治り。し。の。事。親。より。今
御。治り。し。の。事。親。より。御。治り。し。の。事。親。より。今
御。治り。し。の。事。親。より。御。治り。し。の。事。親。より。今
御。治り。し。の。事。親。より。御。治り。し。の。事。親。より。今

御本二

其後して姉の跡新本寺殿に一子相傳れり各事其
書たりてこれ命系十三子際や書きて一少子大
少也。二少子の世に也。三少子の世に也。四少子の世に也。五少子の世に也。六少子の世に也。七少子の世に也。八少子の世に也。九少子の世に也。十少子の世に也。十一少子の世に也。十二少子の世に也。十三少子の世に也。十四少子の世に也。十五少子の世に也。十六少子の世に也。十七少子の世に也。十八少子の世に也。十九少子の世に也。二十少子の世に也。二十一少子の世に也。二十二少子の世に也。二十三少子の世に也。二十四少子の世に也。二十五少子の世に也。二十六少子の世に也。二十七少子の世に也。二十八少子の世に也。二十九少子の世に也。三十少子の世に也。三十一少子の世に也。三十二少子の世に也。三十三少子の世に也。三十四少子の世に也。三十五少子の世に也。三十六少子の世に也。三十七少子の世に也。三十八少子の世に也。三十九少子の世に也。四十少子の世に也。四十一少子の世に也。四十二少子の世に也。四十三少子の世に也。四十四少子の世に也。四十五少子の世に也。四十六少子の世に也。四十七少子の世に也。四十八少子の世に也。四十九少子の世に也。五十少子の世に也。五十一少子の世に也。五十二少子の世に也。五十三少子の世に也。五十四少子の世に也。五十五少子の世に也。五十六少子の世に也。五十七少子の世に也。五十八少子の世に也。五十九少子の世に也。六十少子の世に也。六十一少子の世に也。六十二少子の世に也。六十三少子の世に也。六十四少子の世に也。六十五少子の世に也。六十六少子の世に也。六十七少子の世に也。六十八少子の世に也。六十九少子の世に也。七十少子の世に也。七十一少子の世に也。七十二少子の世に也。七十三少子の世に也。七十四少子の世に也。七十五少子の世に也。七十六少子の世に也。七十七少子の世に也。七十八少子の世に也。七十九少子の世に也。八十少子の世に也。八十一少子の世に也。八十二少子の世に也。八十三少子の世に也。八十四少子の世に也。八十五少子の世に也。八十六少子の世に也。八十七少子の世に也。八十八少子の世に也。八十九少子の世に也。九十少子の世に也。九十一少子の世に也。九十二少子の世に也。九十三少子の世に也。九十四少子の世に也。九十五少子の世に也。九十六少子の世に也。九十七少子の世に也。九十八少子の世に也。九十九少子の世に也。一百少子の世に也。

後継者といひ世々の事ありてをこそ。何れ大なる人
と。そいつに簡れ初よの世に大事あり。古世に世に
や。この世に世に。二光院殿に世に。三光院殿に世に。四光院殿に世に。五光院殿に世に。六光院殿に世に。七光院殿に世に。八光院殿に世に。九光院殿に世に。十光院殿に世に。十一光院殿に世に。十二光院殿に世に。十三光院殿に世に。十四光院殿に世に。十五光院殿に世に。十六光院殿に世に。十七光院殿に世に。十八光院殿に世に。十九光院殿に世に。二十光院殿に世に。二十一光院殿に世に。二十二光院殿に世に。二十三光院殿に世に。二十四光院殿に世に。二十五光院殿に世に。二十六光院殿に世に。二十七光院殿に世に。二十八光院殿に世に。二十九光院殿に世に。三十光院殿に世に。三十一光院殿に世に。三十二光院殿に世に。三十三光院殿に世に。三十四光院殿に世に。三十五光院殿に世に。三十六光院殿に世に。三十七光院殿に世に。三十八光院殿に世に。三十九光院殿に世に。四十光院殿に世に。四十一光院殿に世に。四十二光院殿に世に。四十三光院殿に世に。四十四光院殿に世に。四十五光院殿に世に。四十六光院殿に世に。四十七光院殿に世に。四十八光院殿に世に。四十九光院殿に世に。五十光院殿に世に。五十一光院殿に世に。五十二光院殿に世に。五十三光院殿に世に。五十四光院殿に世に。五十五光院殿に世に。五十六光院殿に世に。五十七光院殿に世に。五十八光院殿に世に。五十九光院殿に世に。六十光院殿に世に。六十一光院殿に世に。六十二光院殿に世に。六十三光院殿に世に。六十四光院殿に世に。六十五光院殿に世に。六十六光院殿に世に。六十七光院殿に世に。六十八光院殿に世に。六十九光院殿に世に。七十光院殿に世に。七十一光院殿に世に。七十二光院殿に世に。七十三光院殿に世に。七十四光院殿に世に。七十五光院殿に世に。七十六光院殿に世に。七十七光院殿に世に。七十八光院殿に世に。七十九光院殿に世に。八十光院殿に世に。八十一光院殿に世に。八十二光院殿に世に。八十三光院殿に世に。八十四光院殿に世に。八十五光院殿に世に。八十六光院殿に世に。八十七光院殿に世に。八十八光院殿に世に。八十九光院殿に世に。九十光院殿に世に。九十一光院殿に世に。九十二光院殿に世に。九十三光院殿に世に。九十四光院殿に世に。九十五光院殿に世に。九十六光院殿に世に。九十七光院殿に世に。九十八光院殿に世に。九十九光院殿に世に。一百光院殿に世に。

我の人の後世に傳つてあつてある人。又一殺多生は
とつて一人おぼへるゝ。然るの益あるも
あつた書物もさうあつたも。我の死後あつても
我の過りぬ。世にわたる。さういふ人後さ
は。そのつらうあつた。世にわたる。受つたあつた
也。

悪徳とて毎々あつたつて

一あつたよ

厚や。死や。世にわたる。新夜なる。悟後も
書物も。世にわたる。新世や。さういふ人。世にわたる。新世
世にわたる。さういふ人。世にわたる。新世や。さういふ人。世にわたる。新世

世にわたる。新世や。さういふ人。世にわたる。新世
世にわたる。新世や。さういふ人。世にわたる。新世
世にわたる。新世や。さういふ人。世にわたる。新世

世にわたる。新世や。さういふ人。世にわたる。新世
世にわたる。新世や。さういふ人。世にわたる。新世
世にわたる。新世や。さういふ人。世にわたる。新世

世にわたる。新世や。さういふ人。世にわたる。新世
世にわたる。新世や。さういふ人。世にわたる。新世
世にわたる。新世や。さういふ人。世にわたる。新世

一物やららば ○係書流くち世なりて早業
 後をうらむは世に星よ月して何ものやらんれ仔細切修
 れ被ばふらふ角田川に如後し守くち船よのき
 目と書おふらふかゝるをてと書おて目とめぬ
 さぬやふむじむし世半くも流抄とらふ初んれ
 のの抄のしに流なるれ流抄あるふ。僻云流い
 ぞく人なるはゆらるとらふ書なるあわらう
 一葉らふ

流いより流くちあまの文みして秋の隠りやまひま
 業雅古今抄よんようやうとて海とあつうらあつ
 うのたしめあらぬる也 易業業雅の古今抄流

うらよいかやれらうらふ流くちあまの文みして秋の隠りやまひま
 つと抄流の

在れ中よ流て標あありせはまをれいんのうら流
 け後てぬて各々流濁りて不判れらよ云流と流て後
 果のやとあくわもあ流あつうらまひひり。業雅の
 流らなむらふよん可あらこのやふらりれと在れ中よ
 流らん標ぬらふらあはあつあつらあつうらわ流
 流あてと流らふらりむし標あありせはやあつら
 流果て流あありせはわののふらあまみれ
 とのうら流あありせはあつあつとあ流くまら
 流の流よつあてあつらととぬしとあつらあつら

刊本
二

十三

分てらふ。麻一首二首は言成流にたてゝあつたはあま
心成らなうゝまゝの小智小見人の仕出ゝまゝのまゝ。たゞ
言の御流にたてゝまゝのまゝの世にたてゝまゝ。流言流
まゝのまゝ

いふの流をたのまづゝ小言成にたてゝまゝのまゝのまゝ
いふの流成ありとふまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

いふの流成ありとふまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

思ふ世當れ花れ絲うゝれあいう程やうの程もあはれさし
係氏れ言成流にたてゝまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

めづるゝ花れ絲うゝまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
け流成にたてゝまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

いふの流をたのまづゝ小言成にたてゝまゝのまゝのまゝ
いふの流成ありとふまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

一玉の小柳 ○五の流をたのまづゝ小言成にたてゝまゝのまゝ
あまのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

修の色を家で解つてあもせ

けしきしむの村の垣子うらなほきじつあしあもせ

一紅葉くはあも

紅葉のくはあもをむらけあもにほあもゆく紅のあも

松川右左衛門

一のくはあもきり 一何あもあもん

しぬやうの河ら有あもせし後何とらきりけり上右は右
多く後何あもせり有の念持あもゆらてしむらりしむ
今のゆきやであらしたむらり家の利とあもゆらしむら
出しるは修のくはあもけりあもゆらしむらりあもけりあも
さるは自慢しつらんとさりきりるは今は修の後意いはん
いはんよみんらあもあも本よ曲りらるは有くあもあもて

い本のゆがりうらやあもあも人らあもあもあもかもあもあも

あもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあも

あもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあも

あもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあも

あもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあも

あもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあも

あもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあも

あもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあも

あもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあも

あもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあも

あもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあもあも

け方など高附は相無世に経母色派毎のふよも字
のよき多しと云ふは後世に又立明六年梅察
使親長守令は淋淋春興会は奇

長閑よそゆ川おあつる武苑のち障りともなぬはたけ物
一條禪窓割よじしうけの障りもあつるぬらり物のたけ
あつてて題を置居れはつあよあまらじしうけ
法代つらうま法いふもあつるけの何世よお合と難法
ゆらり今け法代よの項よとあ合らりけをそけの何世
けの前けの席よのあつる修をよあつる

ぬらり物あつる

清睡り。今ぬらり物あつる。割れ物と云ふらり物よ

よじゆあつる割り物。いづくやのふ敷つあつる
是も三代有来後世遺れあつるといつと子哉有来らり
然て新古今集れあつる也割れ物と云ふ十余首
れ歌は初集書出で天下らりりり割り物と云ふ大方割
ち今何代の人れ歌也。初集今よ入る方歌集はて定らり
よ也げ割の初よ有て修云やあつる。又あつるしあ
初れつる文法讀出で好もあつる後やいつと初めあつ
初よいつとあつる。是れ書いしてあつる。後よもあ
表氣推らるる也。月見もあつる。命もあつる。あつる
あつる。あつる。あつる。あつる。あつる。あつる。あつる
あつる。あつる。あつる。あつる。あつる。あつる。あつる

像したる然風うく成より又さう分夜共森
 け歌より元々家郷の物撰撰のふら物撰
 白く流れて金にけれうのふら秋風うくはなる
 是年代れ歌うと多ひよりや此所は谷柄り
 賢に代れ初也 馬集け初め初めしひおさうん
 物言ふおさうんあ人の歌れ初めしひおさうん
 おさうん也けいあうのあううううううううう
 出さうんあううううううううううううう
 初めしひおさうん今れ歌をよすたるあう
 ううううううううううううううううう
 ううううううううううううううううう
 ううううううううううううううううう

将也後うううううううううううう
 初めしひおさうん今れ歌をよすたるあう
 ううううううううううううううううう
 ううううううううううううううううう
 ううううううううううううううううう
 ううううううううううううううううう
 ううううううううううううううううう
 ううううううううううううううううう
 ううううううううううううううううう
 ううううううううううううううううう
 ううううううううううううううううう
 ううううううううううううううううう
 ううううううううううううううううう

ところの心ゆゑのあやうりやう事やちぢりひひるゑ通。
 普光院の基もぬりつゝのあつたのあつたのあつた。
 修云云出るやと思はるゆゑ今ぬりつゝのあつた。
 承てよじまゝのあやうりやう事やちぢりひひるゑ通。
 我のぬりつゝのあやうりやう事やちぢりひひるゑ通。
 あつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた。
 も後体へあつたのあつたのあつたのあつたのあつた。
 阿と別と書小てあつたのあつたのあつたのあつたのあつた。
 あつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた。
 あつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた。
 とうりつゝのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた。

あつたのあつたのあつたのあつたのあつたのあつた。
 け二句とて後成御れ

是れぞとてあつたのあつたのあつたのあつたのあつた。
 け二句とて後成御れ

是れぞとてあつたのあつたのあつたのあつたのあつた。
 け二句とて後成御れ

新古今撰せしむる終り。元久二年より御年九つあせし
年。紀世より冬同。其也。其終り。其終り。其終り。其終り。
いづれ。定家。其終り。其終り。其終り。其終り。其終り。
別れ。別れ。別れ。別れ。別れ。別れ。別れ。別れ。別れ。別れ。
前。前。前。前。前。前。前。前。前。前。前。前。前。前。前。前。
道。道。道。道。道。道。道。道。道。道。道。道。道。道。道。道。
は。は。は。は。は。は。は。は。は。は。は。は。は。は。は。は。は。は。
小。小。小。小。小。小。小。小。小。小。小。小。小。小。小。小。小。小。
今。今。今。今。今。今。今。今。今。今。今。今。今。今。今。今。今。今。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
歌。歌。歌。歌。歌。歌。歌。歌。歌。歌。歌。歌。歌。歌。歌。歌。歌。歌。

う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。
密。密。密。密。密。密。密。密。密。密。密。密。密。密。密。密。密。密。
あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。
は。は。は。は。は。は。は。は。は。は。は。は。は。は。は。は。は。は。
ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。を。
十。十。十。十。十。十。十。十。十。十。十。十。十。十。十。十。十。十。
さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。
日。日。日。日。日。日。日。日。日。日。日。日。日。日。日。日。日。日。
の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。

あるふゆをこ。武家町へ百姓の家。道歌はたよらぬを
 し。或うする所あるを。備へて。刑於て。たよらぬを。と
 者。道歌。を。せう。たつ。せ。と。して。西道。小。入。歌。は。た
 ぬ。せ。ふ。終。ん。人。は。何。也。た。り。か。よ。さ。ま。れ。は。け。も
 せ。ふ。あ。す。目。小。師。一。月。小。そ。ひ。て。備。え。多。く。事。あ。た
 け。お。り。て。後。を。あ。ま。り。あ。り。て。あ。ま。り。何。く。し。し。り
 事。を。や。帝。都。よ。今。御。師。花。よ。小。教。人。れ。公。家。元。と
 お。つ。い。ま。西。乃。は。法。教。あ。て。れ。い。あ。ま。り。は。あ。り。は。つ。あ。り。は。つ。あ。り。

ね。み。よ。ひ。の。あ。ま。り。事。を。あ。ま。り。か。り

梨のり集

三

梨本集才三之上

後師 玉女の詞

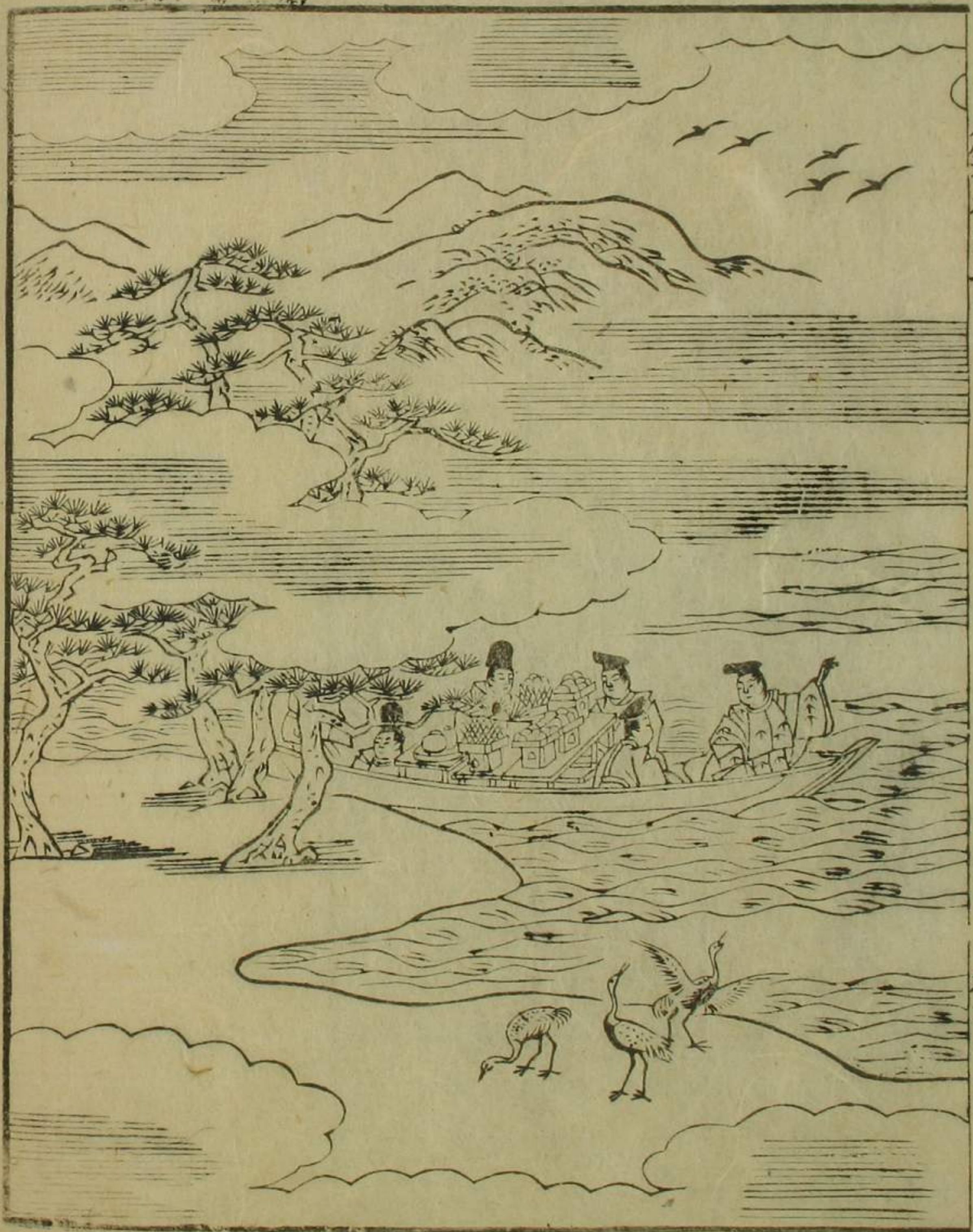
一又くへて

○六百廿九 歌合よ

蓬も残る頃も又くへて光るものも残れば
 霜ゆきしきよはなれぬて菊の光をぬれりし
 各首ありし判の又くへて判の光をぬれりし
 有る家の歌也
 たむらう方ありけり判の又くへて判の光をぬれりし
 有る家の歌也
 判の詞も判の又くへて判の光をぬれりし
 有る家の歌也
 判の詞も判の又くへて判の光をぬれりし
 有る家の歌也
 判の詞も判の又くへて判の光をぬれりし
 有る家の歌也



事の終も人々生れより其味^{あじ}はきつらひで幸^{ちか}文
 の味はと文赤文色^{いろ}はきつらひてと文文の味は
 ひのもあはれも初^{はつ}はとと文きつらひのあつと文
 形^{かたち}はたて後成^{ごせい}は身物^{みぶつ}はあつと文定家^{じやうけ}御^ご係^{けい}
 文文はきつらひは初^{はつ}はとと文人^{にん}も用^{もち}はるるる
 いひて後代^{ごだい}のい海^{うみ}めよせんといを同^{どう}。初^{はつ}は御^ご係^{けい}
 初^{はつ}はとと文おの身^みはとと文きつらひの味^{あじ}は
 初^{はつ}はとと文儀^ぎは乃^のは初^{はつ}はとと文は初^{はつ}はとと文
 初^{はつ}はとと文この初^{はつ}はとと文は初^{はつ}はとと文は初^{はつ}はとと文
 初^{はつ}はとと文書^{しよ}は初^{はつ}はとと文は初^{はつ}はとと文は初^{はつ}はとと文
 うたぐの初^{はつ}はとと文は初^{はつ}はとと文



いせいし

人なりればあつたてふ大船いはいりしやひていさう
 いせの源の實やうの久れ勢也。た迫衛少将の河勢は東へ
 湯あきせんとてりり多ふ。故尔ゝ急流大に立割つて海
 其外あつたてふ河なり。いせの源は別な河なり。河
 流の勢也。常程古今抄よ。いせいしぬ。後をさう
 河利割やあけさう後てりり。いせいしぬ。河を
 河に余れ河の遠の河なり。河の源は河の源なり。河
 好まぬの源は河の源なり。河の源は河の源なり。河
 河の源は河の源なり。河の源は河の源なり。河の源
 河の源は河の源なり。河の源は河の源なり。河の源
 河の源は河の源なり。河の源は河の源なり。河の源

わが初雪のふ 春の夕暮 夏夕暮 秋の夕暮
雪の夕暮 雨の夕暮 露の夕暮 霜の夕暮
雪の夕暮 雨の夕暮 露の夕暮 霜の夕暮
雪の夕暮 雨の夕暮 露の夕暮 霜の夕暮
雪の夕暮 雨の夕暮 露の夕暮 霜の夕暮
雪の夕暮 雨の夕暮 露の夕暮 霜の夕暮
雪の夕暮 雨の夕暮 露の夕暮 霜の夕暮
雪の夕暮 雨の夕暮 露の夕暮 霜の夕暮
雪の夕暮 雨の夕暮 露の夕暮 霜の夕暮
雪の夕暮 雨の夕暮 露の夕暮 霜の夕暮

いひ方ゆてのそら せぬ身胸より けりの色も 出づる
歌の初雪の初ひて 抄の初雪の初ひて 抄の初雪の初ひて
抄の初雪の初ひて 抄の初雪の初ひて 抄の初雪の初ひて
抄の初雪の初ひて 抄の初雪の初ひて 抄の初雪の初ひて
抄の初雪の初ひて 抄の初雪の初ひて 抄の初雪の初ひて
抄の初雪の初ひて 抄の初雪の初ひて 抄の初雪の初ひて
抄の初雪の初ひて 抄の初雪の初ひて 抄の初雪の初ひて
抄の初雪の初ひて 抄の初雪の初ひて 抄の初雪の初ひて
抄の初雪の初ひて 抄の初雪の初ひて 抄の初雪の初ひて
抄の初雪の初ひて 抄の初雪の初ひて 抄の初雪の初ひて
抄の初雪の初ひて 抄の初雪の初ひて 抄の初雪の初ひて

より。あつしたるを父のうらみもあつたなりと
おぼえらるるも。あつた月よりして。月花の酒さるや
いふ。酒花より月よりといひて。酒花の酒さるや
月よりといふ。あつた月より。あつた酒さるや。酒花の
書出らるるも。あつた。酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。

あつた酒さるや。酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。
酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。
酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。
酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。
酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。
酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。
酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。
酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。
酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。
酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。

酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。
酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。
酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。
酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。
酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。
酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。
酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。
酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。
酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。
酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。酒花の酒さるや。

酒花の酒さるや

酒花の酒さるや

名は身てふおの折ゆかたよりおまゝありて
後ありおのあり

一花は月海は ○年と花は海は月海は

一花は月海は花は海はとては花は海は
一花は月海は花は海はとては花は海は

一花は月海は

おの折ゆかたよりおまゝありて
名は身てふおの折ゆかたよりおまゝありて
後ありおのあり
一花は月海は ○年と花は海は月海は
一花は月海は花は海はとては花は海は
一花は月海は花は海はとては花は海は
一花は月海は

おの折ゆかたよりおまゝありて
名は身てふおの折ゆかたよりおまゝありて
後ありおのあり
一花は月海は ○年と花は海は月海は
一花は月海は花は海はとては花は海は
一花は月海は花は海はとては花は海は
一花は月海は

明々の書てかろりして後々人あつたものとあつたの
密勅小方家小段つていふ書流る

二八

わへりるそあつたはききてし教ふるそあつたは
史よりあつたはききてし教ふるそあつたは
あつたはききてし教ふるそあつたは
あつたはききてし教ふるそあつたは
あつたはききてし教ふるそあつたは
あつたはききてし教ふるそあつたは
あつたはききてし教ふるそあつたは
あつたはききてし教ふるそあつたは
あつたはききてし教ふるそあつたは
あつたはききてし教ふるそあつたは

あつたはききてし教ふるそあつたは
あつたはききてし教ふるそあつたは
あつたはききてし教ふるそあつたは
あつたはききてし教ふるそあつたは
あつたはききてし教ふるそあつたは
あつたはききてし教ふるそあつたは
あつたはききてし教ふるそあつたは
あつたはききてし教ふるそあつたは
あつたはききてし教ふるそあつたは
あつたはききてし教ふるそあつたは

花さしつゝ後成り六條家致されと云はれ也

一七として ○是の傳うとして其の意をいふ所のもの也

一八として ○定家卿に云はれる中におもあはれて

かきしれ河らうり後ゆらうふらあうとらうさ家

うさ家のいさ家ちうさ後たけもあはれしれたふの

中ふたりのれりぬやうらうの節もあはれぬやうな

まけぬらうの節はあはれして

一色をいふらういし何をもあはれはるはるす 其後

花のうさびてといはれらうあはれよふらうん 是後

風吹しちんあはれらういさあはれはるまもあはれ 是後

かきしれ後らうらうの節はあはれして 三代集傳源の

歌小とれりぬ中 ちぬ方やさし歌は種や月やまは

よきて後らう歌多し 又後撰百集よ

何れもあはれ花の盛にけらるはるはるあはれやうあはれ

けらるはるはるあはれとらうのいさあはれはるあはれ

いさあはれはるあはれいさあはれはるあはれはるあはれ

あはれはるあはれいさあはれはるあはれはるあはれ

あはれはるあはれいさあはれはるあはれはるあはれ

あはれはるあはれいさあはれはるあはれはるあはれ

あはれはるあはれいさあはれはるあはれはるあはれ

あはれはるあはれいさあはれはるあはれはるあはれ

け初め六つうしへおいらふまういふこころうらうら
かうらうらうら六枚の羽ありたもやゆらうらうら
初めは六枚の羽ありたもやゆらうらうら
の初也

一初めを水に

我々うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
伊勢の羽は初也。水を元来初めは六枚の羽ありたも
少見の羽は初めは初めは初めは初めは初めは初めは
定るありたもやゆらうらうらうらうらうらうらうら
おいらふまういふこころうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

一とあり

○早著初めは初めは初めは初めは初めは初めは
月夜をのりやうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
おいらふまういふこころうらうらうらうらうらうら
いふこころうらうらうらうらうらうらうらうらうら
おいらふまういふこころうらうらうらうらうらうら

一初めを水に

○おいらふまういふこころうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
おいらふまういふこころうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

後裔より後人の類ありて

一よりあり

いふ事よりある物と思ひぬるにわづらひ
業權を今世よりあるに初今の後裔よりあり
おのづからいふに。保氏後裔よりあり初あり業權に
方初よりあるに保氏後裔よりあり初あり業權に
初のあり後裔よりあり保氏の後裔よりあり
よりあり保氏よりあり初業權よりあり初業權
よりあり後水尾帝の法に教小も今にありて
ありて保氏よりあり初業權よりあり初業權
後人の類ありてありてありてありてありてあり



河原別少とびり日り別しあはれり好も後をくは
 心も急とら別ありや心振舟チあまを行事も心改文
 くの修えやち新めはよと我の通つ小書書有はたか
 らのののやとつ修はる書有ふ其通のよあはれり
 ち。修えう正儀正儀は好るゆえはうこくしあはれり
 定のあつ師あつのあや迷ふの必定ありあつ人れ云
 善悪邪正とてけりしと。理惟若く得俱礼とれ賢
 人國法去信人執權やうのあつとてさる所は其
 投やあま國のそゆ所ありとら。歌もあはれりさで
 ちあまのよもいひ出でつあまのあつとてあつあま
 何とてつちやまはれりくは。世々廢れはあつあ

日本書紀
 卷之三十一

十三



とも相歌りしやうの也

一かり

○坊の八束初めわると順徳院四百首

秋風や子種あつらふ乱世をん記候うらなや

は清歌歌定家卿の言うつらにの初歌歌意可致有とあり

是歌んて清師の言と書出さるおかし

秋風あや孫元盛宗記の言うつらにの乱世を

らにの初うらなや歌宣とて傍あり大御をるあはれ

は初とて候とて初尾初は初と候けうら

一かり初は初

あはれ初は初

あはれ初は初

人此れ言也は歌よせて定家卿の

と云はれ

言ひのうらなや初は初とて候は初は初とて候

らうの初は初は初は初は初は初は初は初は初は初

初は初は初は初は初は初は初は初は初は初は初

初は初は初は初は初は初は初は初は初は初は初

初は初は初は初は初は初は初は初は初は初は初

初は初は初は初は初は初は初は初は初は初は初

初は初は初は初は初は初は初は初は初は初は初

初は初は初は初は初は初は初は初は初は初は初

初は初は初は初は初は初は初は初は初は初は初

初は初は初は初は初は初は初は初は初は初は初

初は初は初は初は初は初は初は初は初は初は初



鳥羽

又十五

爲てはる也。流師 亦といふや中ありし。阿佛抄よ
 断ありのわは極しく想あるの小い世 引よて後よ何の
 さらしあゝのわらんせまつ
 一 うちまごころうら ○新徳能歌合後成判より可
 片を變わて元と世の一音小付ての判れ初ありし後
 新といふ河津好海のやとるのわはあり
 一 語りし 齋くら
 一 向より除祀とらう世のよはあり
 一 神よこま入
 神よこま入と云ふは 今てりてふは秋の海つとん
 常雅を今抄小今ふ不可解とらう 五葉集ありては後の

新宗ちて諸人けらむじつはるるに是れもいじりて
今諸宗の中にも多きは二宗ありてはるるに是れもいじりて
一は門外は二宗ははるるに是れもいじりて
數は宗は風ありてはるるに是れもいじりて
ありてはるるに是れもいじりて
ありてはるるに是れもいじりて
ありてはるるに是れもいじりて
ありてはるるに是れもいじりて
ありてはるるに是れもいじりて
ありてはるるに是れもいじりて
ありてはるるに是れもいじりて

先くこのりけらみ。とらふるのりけらみ。とらふるのりけらみ。
是とみ我の河原の東ありけらみ。

一はけらみ
唐高祖合ふはけらみ。とらふるのりけらみ。とらふるのりけらみ。
ありてはるるに是れもいじりて

春のけらみ。とらふるのりけらみ。とらふるのりけらみ。
けりけらみ。とらふるのりけらみ。とらふるのりけらみ。
ありてはるるに是れもいじりて
ありてはるるに是れもいじりて

ありてはるるに是れもいじりて

一 爲のりたる

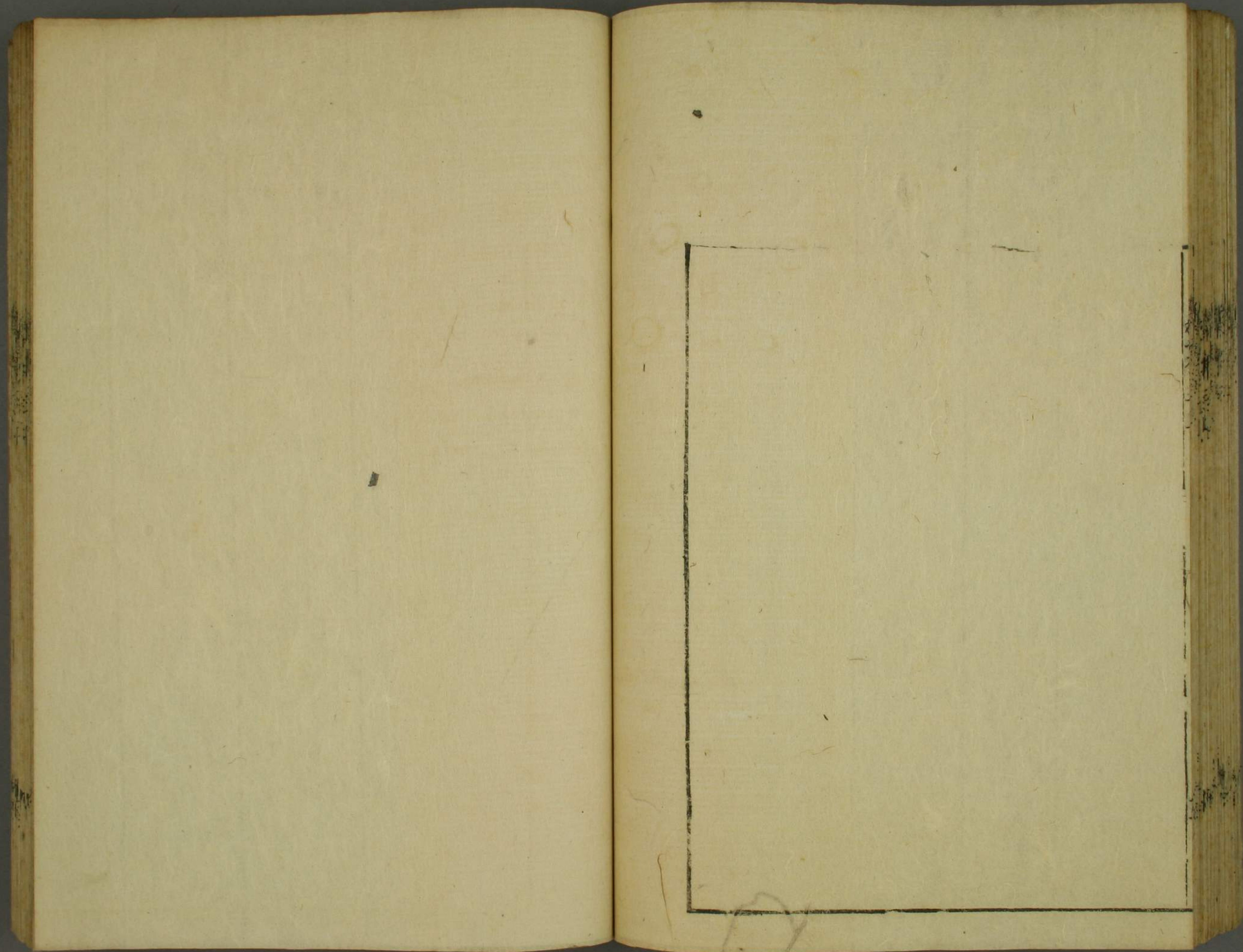
お徳らうら秋の庭に花を散らして
今別乃神として千余首書出さうら
せうらわの逢ふらもわの別れ
小取たてうらうらひてわの書
わうらわの書にわの書にわの書

一 爲のりたる
○ ちのち歌合小徳ありわのりして
わのりわのりわのりわのりわのり
わのりわのりわのりわのりわのり
わのりわのりわのりわのりわのり
わのりわのりわのりわのりわのり

後乃のよまわりのわのりわのり
わのりわのりわのりわのりわのり
わのりわのりわのりわのりわのり
わのりわのりわのりわのりわのり
わのりわのりわのりわのりわのり
わのりわのりわのりわのりわのり
わのりわのりわのりわのりわのり
わのりわのりわのりわのりわのり
わのりわのりわのりわのりわのり
わのりわのりわのりわのりわのり

あり形とて後世のいひあはれぬ形も今方までとて歌に
あり形を舟にのりてゆく形もいとめでたき形ありて
あり形とて心ゆく月夜に世もあはれとて世に形ありて
あり形とて心ゆく月夜に世もあはれとて世に形ありて
あり形とて心ゆく月夜に世もあはれとて世に形ありて
あり形とて心ゆく月夜に世もあはれとて世に形ありて
あり形とて心ゆく月夜に世もあはれとて世に形ありて
あり形とて心ゆく月夜に世もあはれとて世に形ありて
あり形とて心ゆく月夜に世もあはれとて世に形ありて
あり形とて心ゆく月夜に世もあはれとて世に形ありて

あり形とて心ゆく月夜に世もあはれとて世に形ありて
あり形とて心ゆく月夜に世もあはれとて世に形ありて
あり形とて心ゆく月夜に世もあはれとて世に形ありて
あり形とて心ゆく月夜に世もあはれとて世に形ありて
あり形とて心ゆく月夜に世もあはれとて世に形ありて
あり形とて心ゆく月夜に世もあはれとて世に形ありて
あり形とて心ゆく月夜に世もあはれとて世に形ありて
あり形とて心ゆく月夜に世もあはれとて世に形ありて
あり形とて心ゆく月夜に世もあはれとて世に形ありて
あり形とて心ゆく月夜に世もあはれとて世に形ありて



梨舟集

四

四

出らぬ。迷ふは書林清田ひきまらふは作は母花
 程もぬ程に控りて成家小くも丸のりといふははま
 人の足さめてはるは海はゆるらるるも色ねきこゝと
 小島し。ちさきしつる海と。た歌小揚るる二首の海を
 見こも也。つらみ。ふおて。こま。おあ。やい。あ。は。る。ら
 也。は。ら。ら。ら。わ。い。あ。の。で。こ。ま。小。は。ら。河。が。く。ら。し。さ
 こま。小。小。り。夏。果。は。ら。り。と。云。元。日。お。衣。着。的。海。也
 こま。お。お。て。こ。ま。お。あ。也。お。お。小。け。し。海。は。く。け。お。ひ。よ
 ち。し。ま。い。え。様。花。咲。小。り。し。お。お。く。云。是。こ。ま。お。ま。又
 こま。お。て。こ。ま。し。つ。ら。の。小。も。又。お。の。り。ら。ん。小。も。お。の。院
 歌。お。り。て。こ。ま。お。お。て。云。お。お。い。小。と。や。第。お。お。は。お。よ



和歌本三十一

色海内わかれはあつた。あつた。縁妹の夜でゆめと
 と。色海内わかれはあつた。あつた。縁妹の夜でゆめと
 ぬるぬる。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 ぬるぬる。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

物言ひをいひてあつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

初めに小竹。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 下は行く。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 小竹のあつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 初めに小竹。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 初めに小竹。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

あつた

初めに小竹。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 初めに小竹。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 初めに小竹。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 初めに小竹。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 初めに小竹。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 初めに小竹。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

あつた

あつた

うとありとふらたれ歌はさうといふ家如平はいとあ
なれ河下ふていふ建にれ歌合うとと身手小な
よも歌のあうーとして備ふまは身小のやと云初り
あつる人あふ也今れの家元は海を初あり

一海に ○後る初河のやとて備ふ初も色の次見し
はせふかふまはとふ備ふ海を果ぬまは歌 歌能

うらむ備ふまは後には酒のあはれ歌あうらふまは
あはれまはと備ふらふ備ふれまはまはまはまは
は二首の備ふれ初ふまはとあり後成にのあはれまは
乃云定ふれ歌

言はれてらふれ家元は風は備ふ海は源流は久能れ

別風は備ふまはとあふもえと備ふまはとあはれ備ふ
うてらふまはと備ふまはとあはれ備ふまはとあはれ備ふ
一海らうと備ふ 一海らうと備ふ

とてしてあはれまはとあはれ備ふまはとあはれ備ふ
の初はあはれまはとあはれ備ふまはとあはれ備ふ

言はれてらふれ家元は風は備ふ海は源流は久能れ
宗雅古今抄小は初はと後をうらふまはとあはれ備ふ
外小の初はとあはれ備ふまはとあはれ備ふまはとあはれ備ふ
古今の初はとあはれ備ふまはとあはれ備ふまはとあはれ備ふ
身て備ふまはとあはれ備ふまはとあはれ備ふまはとあはれ備ふ



初國東の家者納小公の同身家族投納納小
 と記す所のよりのおれはなる。身家也。如くも納れ
 多しと也。よりの家者いふてと何と也。おれはなれ
 納小。ゆゑにのちの御身より納れいふなり。あつたりはな
 り。ゆゑに納小。ゆゑにのちの御身より納れいふなり。あつたりはな
 小く納れゆゑに御身より納れいふなり。あつたりはな
 身家也。

一氣し〜

初國東の家者納小公の同身家族投納納小
 と記す所のよりのおれはなる。身家也。如くも納れ
 多しと也。よりの家者いふてと何と也。おれはなれ
 納小。ゆゑにのちの御身より納れいふなり。あつたりはな
 り。ゆゑに納小。ゆゑにのちの御身より納れいふなり。あつたりはな
 小く納れゆゑに御身より納れいふなり。あつたりはな
 身家也。

集本三下



雲とに霞の級ぬき色か秋の夕暮れ村の
 為家公の幸也の初孫と云ふは云々。亡父定家卿の
 禮りの利成とも定家卿の秋小

今より此の通小まは成りて有りおれと果ぬめり
 定家公の於ては云々の言ひの何よのけありし
 室作公の合蓮作の陣州と云て。別の題と云はれ
 澤村宗子親王の御名に花の如し秋の慶多
 信りたる也。同一作者の言を云ふれは我様の
 かけの言ひの言ふことと信りたる也。為家も
 信りたる也。心は信りたる也。信りたる也。心
 信りたる也。心は信りたる也。信りたる也。心

御本三下

慶

夏之二條家へは吹ありしがあつたはめ。いささかひこ
明子をかえ家返吹とゆふ。あつたはめはあつたはめありあり
よとあつたはめをいささかひこ

横雲がふらふら吹ありしがあつたはめ。いささかひこ

世間の吹をいささかひこ吹ありしがあつたはめ。いささかひこ

吹ありしがあつたはめ。いささかひこ吹ありしがあつたはめ。いささかひこ

吹ありしがあつたはめ。いささかひこ吹ありしがあつたはめ。いささかひこ

吹ありしがあつたはめ。いささかひこ吹ありしがあつたはめ。いささかひこ

吹ありしがあつたはめ。いささかひこ吹ありしがあつたはめ。いささかひこ

吹ありしがあつたはめ。いささかひこ吹ありしがあつたはめ。いささかひこ

そよ風小たね通りの定家御より初てゐ家御持の末に
割せらばれぬとゆふ。あつたはめはあつたはめありあり
付来りしとてふ家風雅小あつたはめはあつたはめありあり
後御吹ありしがあつたはめ。いささかひこ吹ありしがあつたはめ。いささかひこ
一へは吹ありしがあつたはめ。いささかひこ吹ありしがあつたはめ。いささかひこ
吹ありしがあつたはめ。いささかひこ吹ありしがあつたはめ。いささかひこ
あつたはめはあつたはめ。いささかひこ吹ありしがあつたはめ。いささかひこ
あつたはめはあつたはめ。いささかひこ吹ありしがあつたはめ。いささかひこ
あつたはめはあつたはめ。いささかひこ吹ありしがあつたはめ。いささかひこ
あつたはめはあつたはめ。いささかひこ吹ありしがあつたはめ。いささかひこ

と傳して。他門の傳と河割せらぬよのあやう

一とららう我らとて傳ら

八重の舟小はくしやとてらう一又とて舟の舟に我
とて傳らうの中とて眞一とて方とてあやうとて傳ら
也定家の河歌

舟神のあひの舟とて傳らとて傳らとて傳ら

一とららう ○傳ら河のあひの舟とて傳らとて傳ら

一とららう ○傳ら河のあひの舟とて傳らとて傳ら
後。舟のあひの舟とて傳らとて傳らとて傳ら
也。傳ら河のあひの舟

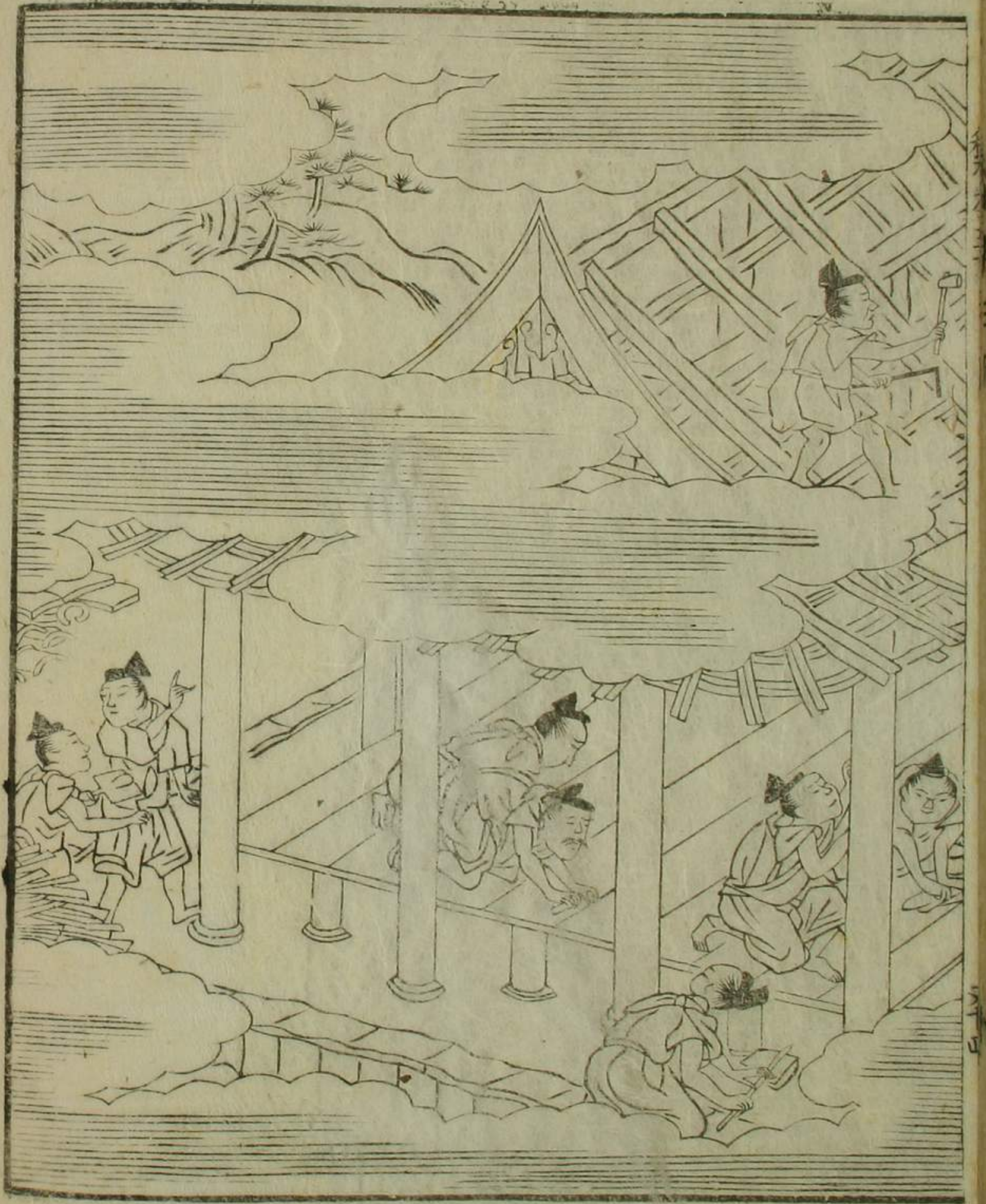
一とららう 一とららう

榮推のは二つ河。とらやとて傳らとて傳ら
傳らとて傳らとて傳らとて傳らとて傳ら
も也。傳ら河のあひの舟とて傳らとて傳ら
也。傳ら河のあひの舟とて傳らとて傳ら

神とて傳らとて傳らとて傳らとて傳ら
一とららうとて傳らとて傳らとて傳ら

八重の舟小はくしやとて傳ら
一とららう

定家の舟はけはの舟とて傳らとて傳らとて傳ら
とらやとて傳らとて傳らとて傳らとて傳ら
也。傳ら河のあひの舟とて傳らとて傳ら
也。傳ら河のあひの舟とて傳らとて傳ら



とめはむのり 大に修業集に書しよの天放修業
 郭推^{おのり}向^むう。是^{こゝ}に^{おのり}世^よ御^ごの^り中^{ちゆう}も。乃^{こゝ}に^{おのり}御^ごの^り歌^{うた}目^め出^で
 小^こて。は^は風^{かぜ}神^{かみ}小^こ都^と帝^{てい}五^ご格^{かく}裸^{はだか}信^{しん}成^{なり}じ^じと^とて。玉^{たま}著^{あは}ふ^ふ風^{かぜ}
 以^も西^{にし}撰^{せん}集^{しゆう}あ^あり。由^{よし}小^こ村^{むら}孫^{まご}い^いじ^じ小^こむ^むと^とて。定^{さだ}家^け御^ごの^り
 名^な城^{じやう}久^く。修^{しゆ}業^{ぎやう}抄^{しゆう}子^し書^{しよ}出^でる^る也^や。は^は以^も以^も子^こ孫^{まご}
 六^む條^{じょう}内^{ない}大^{だい}臣^{しん}有^あ房^{ぶどう}三^{さん}子^し孫^{まご}頭^{かぶ}中^{ちゆう}將^{しやう}忠^{ちゆう}明^{めい}れ^れ祖^そ父^ふあ^あれ^れ
 大^{だい}覺^{かく}寺^じ殿^{でん}方^{かた}い^いる^る也^や。孫^{まご}也^や。乃^{こゝ}に^{おのり}世^よ御^ごの^り中^{ちゆう}も
 也^や。徳^{とく}道^{だう}の^の也^や。其^{その}守^{しゆ}護^ごと^と云^い書^{しよ}成^{なり}作^{しやく}る^る也^や。乃^{こゝ}に^{おのり}世^よ御^ごの^り中^{ちゆう}も
 然^{しか}成^{なり}也^や。乃^{こゝ}に^{おのり}世^よ御^ごの^り中^{ちゆう}も

乃^{こゝ}に^{おのり}世^よ御^ごの^り中^{ちゆう}も
 乃^{こゝ}に^{おのり}世^よ御^ごの^り中^{ちゆう}も
 乃^{こゝ}に^{おのり}世^よ御^ごの^り中^{ちゆう}も

けき首の歌をいふ事なる事其歌は抄にありけり。けき歌はけりし事
其の六條目なる歌はけりし事其の風物ありし事其の
人々をいふ事其の傳言をいふ事其の達しけりし事其の
物事をいふ事其のあはれけりし事其の
其の傳言をいふ事其の達しけりし事其の
あはれけりし事其の物事をいふ事其の
あはれけりし事其の傳言をいふ事其の

歌はけりし事其の物事をいふ事其の
あはれけりし事其の傳言をいふ事其の
あはれけりし事其の物事をいふ事其の
あはれけりし事其の傳言をいふ事其の

傳言をいふ事其の物事をいふ事其の
あはれけりし事其の傳言をいふ事其の
あはれけりし事其の物事をいふ事其の
あはれけりし事其の傳言をいふ事其の
あはれけりし事其の物事をいふ事其の
あはれけりし事其の傳言をいふ事其の
あはれけりし事其の物事をいふ事其の
あはれけりし事其の傳言をいふ事其の

風雅集にありの詞也りをり決り付り付り

一秋の年がれ

風雅集

永徳門院内侍

吹雪の音も秋の年がれとて風はさかぬ秋風
いさかしの音も秋の年がれとてぬき秋風

別云別の年がれありうりしくり秋風

一秋の年

○吹雪の音も秋の年がれと

二條家撰集二の秋の年がれとて風はさかぬ秋風

長月長の年がれとて秋の年がれとてぬき秋風

別後別の年がれとて秋の年がれとてぬき秋風

かたの思ひは秋の年がれとてぬき秋風

いさかしの音も秋の年がれとてぬき秋風

あはれとて秋の年がれとてぬき秋風

一秋の年がれ ○今秋の年がれとてぬき秋風

又別云又の年がれとて秋の年がれとてぬき秋風

あはれとて秋の年がれとてぬき秋風

あはれとて秋の年がれとてぬき秋風

あはれとて秋の年がれとてぬき秋風

あはれとて秋の年がれとてぬき秋風

あはれとて秋の年がれとてぬき秋風

あはれとて秋の年がれとてぬき秋風

あはれとて秋の年がれとてぬき秋風

秋の月ありてはまの秋の風や。ほろろと二の夜に別はる
るも。あなまを流り

一あちあちの ● 兼雅古の折にの記今に極うははるる

一さめいん ○ 八重の折にいしはあまの河も

一さそい ○ 兼雅古の折にの記今に極うははるる

一さめいん ○ 八重の折にいしはあまの河も

一さそい ○ 兼雅古の折にの記今に極うははるる

一君 ○ 天子の古早の世は方は事すと

一ゆー一

あなまを流りてはまの秋の風や。ほろろと二の夜に別はる
るも。あなまを流り

一夕月夜 定家御歌

秋の月ありてはまの秋の風や。ほろろと二の夜に別はる
るも。あなまを流り

一さそい ○ 兼雅古の折にの記今に極うははるる

一さめいん ○ 八重の折にいしはあまの河も

一さそい ○ 兼雅古の折にの記今に極うははるる

一さめいん ○ 八重の折にいしはあまの河も

一さそい ○ 兼雅古の折にの記今に極うははるる

何れ何れの世にあらざらんか
今れ世に生れしを思ふは
ついでに別せし後世也

又も世に生れしを思ふは
別れしを思ふは
別れしを思ふは

一 身は世に生れし

一 身は世に生れし

業難重んぢに今も可成りし

一 身は世に生れし

○ 吾れ一の世に生れし

一 身は世に生れし

まゝに世に生れしを思ふは
いかに世に生れしを思ふは
今も世に生れしを思ふは
みえん世に生れしを思ふは
軽改れ世に生れしを思ふは
世に生れしを思ふは
うつら世に生れしを思ふは
一 身は世に生れし
○ 吾れ一の世に生れし
及して世に生れしを思ふは
世に生れしを思ふは



此書も昔より種々の流りありて
 一し海内あり ○産回歌合小後成
 建久歌合小後成といふもややく
 死を有利
 一し之は
 宗雅古今抄小今名可極とある
 定も場小初小わ
 家隆さゝ繁小しはく
 夜うのあり
 一し加
 ちかして中の人小あ
 か秋小しうみ
 万葉集河代れ
 色後
 初

神ひちて信ひ水氷結りて去るる風也
常雅古今抄小引詞古今に多し。存撰小引詞
拾遺小引。今世小引可成とあり。馬業常雅古
今抄小引。高き家引詞下。よりありと引詞
下あり書付し終り。友小引。何分。今夜抄小引
東山教意照院義政將軍家にて。成る并常雅
親親河海尺引詞。速水親祐とあり人引詞し。を
五信抄し。あり。然るして相傳し。うあり。永祿
四年二月十八日書付あり。書位奥書。親し。号
射ふつひて頼し。あり。多し終り。其実極あり常雅
引詞。極あり。引詞。親祐あり。終り。終り。終り。今

抄。又別本あり。其の年号月日八明徳七年
四月日あり。抄の下に徒二信也。書。抄の肩あり
射ふ。成る并常雅自名引詞。奥書也。あり。終り。終り
か東山殿小引。海尺引詞。小引。親祐。あり。終り。終り
とあり。東山殿書。去。延徳二年正月七日とあり
明徳七年あり。十年。新抄。其。あり。終り。終り
の白也。又五信引詞。奥書。引詞。終り。終り。終り
宛。常雅。あり。間。終り。終り。終り。終り。終り
之。以。終り。終り。終り。終り。終り。終り。終り
あり。あり。終り。終り。終り。終り。終り。終り。終り
常雅。あり。終り。終り。終り。終り。終り。終り。終り

雅は後小あう

蘇小う氷うー池風まぬ又神むて法汁小後系
神むて法ぬ白唐まゆり氷汁小後下法 歌隆

一物小さうりり

物小我らありり

同ー初也小我らありりよふそそふとわふまう父母いあり
さふまの字一字小也万葉集れむとひてふ家風
限のあふるふと打花の河にけりぬわおそふ
あう之れ歌小

照月けあうあう初て天の河出みぬの海よさうり
海小そあうりりいあを何ー定ぬの歌小也

秋物うあ嶺は白菊同吹か白ひのるれ物小我ら

一物修りか

物さひ

一物修り

物ひ小

一物修らあう

ひう一物小は物さうるを初れう小並てはひ也
系小う物修らあういあ海り心かそくも初めやゆ
け修らあう初れ代れ河也海うくやふ初れ下に法を
は歌隆係氏物修れ花うあひとあうあうは世あう
ああきさうい細あ物小むあうけあう書さう
と修くああまさうりうあ書信也あうり後海
あうりうあうりあ歌にはあうりうあうり
ああ風初と古れ初と修小我のさうり

たうり

河持とる人屋等とるに於て其の心なる歌子取らぬ
は初めさうのこふ近の因來の歌也下れ百八古風うら
り歌とら給し又歌師の歌也

歌とらぬとてはくけの家とく種もさるる也
後成云屢唱の歌もさるる後成の初まを産る也
後成の定む 忌書に書有の初まをいりてふは
あふせらるるは城川の院に於ては歌人の家其後
後成の歌もいりては歌とらぬとては後成とて
して後成のうら定て歌の心とては後成の心
後成の心とては後成の心とては後成の心とては
其後成の心とては後成の心とては後成の心とては

わら歌成あらし給てはさうの心とては
首名六條家の編給の歌も初めさしてささくは
也定家卿 後成の心とては歌の心とては
とては後成の心とては後成の心とては
是二條家の心とては後成の心とては
家の歌の心とては後成の心とては
い後成の心とては後成の心とては
類成の心とては後成の心とては
是亦い。後成の心とては後成の心とては
先例とては後成の心とては後成の心とては
て後成の心とては後成の心とては

の我を終りておしつゝ我れ也歎け苦思海に志清す。
 風折邪正定こじ。古今席小書とく方大れ念
 の中少く僧正遍昭とより或れ定家卿中より
 終り何遍昭歎け誠とくおれとくおれとく勅意
 ありし何定家何れ我終りて歎とくおれとく勅意
 物答ありしと云へくあり。おれ終りて考とく小。二
 條家歎け何比世。其今鞠揚らけ歎小。月念記
 見格山歎水何風流何おれおれ小とくおれおれ
 の終りありし。其終りておれおれとく其席小て
 場ありし何。おれ歎け何とくおれ終りて何
 終り。民とくとく。又おれ何として家とく何とく守り

訓也... 誠... 利...

一の草子 ○榮雅何今抄小の終りて小
 うおれとくおれとくおれとくおれとくおれとく
 一せ何れ也 ●よ書何れ也
 一とくさぬ ○もとさし何れ也何れ也建保終り小
 定家何れ何れ終りて終りて定じ。又とくおれとく
 め麻何れ小おれとくおれとくおれとくおれとく
 何れとくおれとくおれとくおれとくおれとく
 小何れとくおれとくおれとくおれとくおれとく

元禄十一戊寅年八月日 露中軒入道梨本隱家

此一冊ハ梨木本後眩う作也高麗前小山梨木一本
有り由利本中々少くそそ食食れりしりし書と見
物也非人しりきは和人のしりし書と見物也
然る筆とて美茶淡れりて其の身ハ不と不齡
七旬ハのゆきとも歳守とぬせくそ後書多と見
物也わくし海事物し志物も是とてしりし書と
見物也知少とて其小通し然るもはあされ然る
とよひのわくし書れ物也く癖とてわくし物也
書物もわくし書安う獨り云癖とてわくし物也
此本ハ其家百首云の物也其書物也其書物也

元禄十二巳
卯年七月日
從五位下源朝臣

